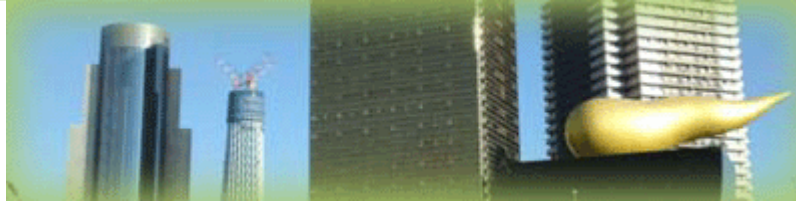


2010.02
【第2号】



※ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。
今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。

INDEX

1. 新年会&プレ企画『宿泊所について』
2. 『福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した人々の自立支援を考える東京集会』
3. 地域ケア連携をすすめる会 シンポジウム
4. ふるさと寿々喜屋(すずきや)ハウス開設
5. シンポジウム 現代社会における「女性の貧困を問う!」

1.新年会&プレ企画『宿泊所について』

2月11日、今年も遅ればせながら多くの方のご協力をいただきまして新年会を開くことができました。日頃からお世話になっている行政関係者、地域の医療及び福祉関係者、そしてマスメディアの方々など、総勢で64名の皆様にご参加いただきました。例年以上のご参加をいただけたことに感謝申し上げますとともに、やはり昨今の社会情勢が背景にあって多くの方の問題意識が非常に高まっていることの証であると感じざるをえませんでした。

プレ企画『宿泊所について』では、浅草病院本田徹医師、NPO山友会油井和徳氏、ライター佐藤幹夫氏をお招きして、最近度々新聞でもクローズアップされている「宿泊所」の在り方について討論会がありました。

冒頭、当会滝脇憲理事から『宿泊所について』と題していくつかの問題提起をさせていただきました。国(厚生労働省)は、困窮者を対象としたいいわゆる「貧困ビジネス」の問題を解決すべく制度作りを検討しています。しかしながら、施策の中心となるのは行政が施設を作って福祉専門職を配置するという旧来の方法です。これに対して滝脇理事は、「宿泊所を利用せざるを得ない人たちの多くは、家族の支えがない単身の認知症要介護高齢者や疾病を抱えた人たち。そうした現状やそうなる社会構造をしっかりと踏まえて、地域社会をどのように変えていくのかという包括的な解決策が必要。生活支援やケアのネットワークをどのように構築するのか、雇用創出などを通じて地域をどう変えていくのか、そうしたことが今問われている」と訴えていました。

NPO山友会の油井氏からは、去年5月に開設した「山友荘」での支援に関する報告がありました。福祉事務所から依頼されるケースの中には、ケースワーカーも切羽詰まってしまい、「他に行き場がないから」と頼まれる大変困難な状態にあるケースも多いとのことでした。

本田医師からは、医師(病院)の立場から、退院後の生活場所の確保についての切実な声がありました。「病院も医療的ニーズの少ない患者を長期間抱えることは財政的な理由から困難であり、地域に宿泊施設があるということとは大きな助けになっている。」という率直なご意見がありました。

佐藤幹夫氏からは現場でのケアの在り方についてご意見がありました。「宿泊所から路上生活に戻ってしまうケースがある。これは現場でのケアが本人の安心や安定にはつながっていないということ。支援する側からされる側への一方向的な関係ではなくするためには、ケアする人のケアを充実させることも大切」と話されていました。

懇親会では、初鹿衆議院議員、墨田区福祉事務所の皆様、そして寿々喜屋ハウスの鈴木オーナーより御挨拶がありました。国、自治体そして地域住民という立場の違いを超えて同じ課題に取り組んでいることが再確認できた瞬間でありました。

宿泊所をはじめとする居住の問題がクローズアップされており、何はともあれ安心して生活をスタートできる支援付き住宅の拡充が引き続き大きな課題となります。しかし、そのことに留まらず、一人ひとりの生活がより充実したものになるためにも、より良い生活環境を造ることに引き続き努めていきたいと思っております。これからも皆様からの厚いご支援をよろしくお願い申し上げます。



寿々喜屋ハウス内覧会の様子



佐藤幹夫氏



本田医師



油井和徳氏



初鹿衆議院議員



(左) 田辺登職員

(右) 寿々喜屋ハウスオーナー鈴木氏

2.『福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した人々の自立支援を考える東京集会』

2月4日、霞ヶ関の衆議院第2議員会館において、「矯正施設等退所後の支援に関する集会が行われました。国会議員の方や全国各地から福祉関係に携わる大勢の方が参加されました。その中で議題に上がったことは、高齢

者や障害者の刑務所出所者の受け皿の整備についてでした。地域生活定着支援センター等のコーディネート機関の設置が滞っていること、受刑者には知的障害者が多数いることが見過ごされていて、満期出所後に受け皿がないために再犯を繰り返さざるを得ない状況を作ってきたことなどの説明がありました。

はじめに、全国の先陣を切って地域生活定着支援センターを開設した「南高愛隣会」理事長の田島良昭氏より刑務所における知的障害者の実情について問題提起がありました。「厚生労働省は、一般受刑者に占める知的障害者の数を約400人としているが、実際は1万人以上いるのではないかと考えられる。これまでそのような方達を司法行政に任せきりで、その事実を知らないがために福祉行政は何も出来なかったという事実が現実にある」と訴えていました。

続いて、元衆議院議員で作家の山本謙司氏より、服役経験に基づいた発議がありました。山本氏は、府中刑務所で3年半生活する中で受刑者の半数以上が知的障害者ではないかと感じたそうです。また、一歩社会に足を踏み出せば、安心できる居場所がないために誘惑や偏見といったことから犯罪に手を染めざるを得ない状況に追い込まれてしまうことが問題なのではないかとおっしゃられていました。

最後に、更生保護法人「同歩会」水田理事長より、出所後の福祉サービスの在り方について問題提起がありました。出所後に福祉サービスが必要な方が大勢いるにも関わらず、地域の社会資源が不足している為にホームレスにならざるを得ない現状を訴え、再犯防止のためには地域の中できちんと受け皿をつくるのが大事であり、その中でネットワークを広げてきちんとした支援の輪を作る必要性を強調されました。

集会に参加して感じたことは、参加された方々は皆この度の集会の本当の意義、そして国を挙げて早急に整備していかなければならない課題がすぐ目の前にあることを肌で感じ取られたのではないかと思います。現実を受け皿となるべき地域生活定着支援事業が行き詰っているのは、福祉を必要としている方の受け入れに福祉が難色を示している事実があります。福祉を必要としている人が福祉に見捨てられかねないという現実が起こってしまっているのも事実です。社会福祉の理念である「インクルージョン」が実現された社会の構築の為に、ふるさとの会が果たさなければならない役割を感じ取れた集会となりました。(佐藤誠)



3.地域ケア連携をすすめる会 シンポジウム

2月13日、台東区立台東病院で「地域ケア連携をすすめる会」の第一回目のシンポジウムが開催されました。第一部では、粟田氏(東京都健康長寿医療センター 自立促進と介護予防研究チーム研究部長)から認知症ケアについての基調講演があり、第二部では「単身低所得者・障害者の地域生活支援と居住サービス・医療サービス」と題して主に山谷地域で活動する団体から報告がありました。

粟田氏からは、認知症患者を取り巻く環境や治療についての報告がありました。病院等の専門機関でも認知症の診断や周辺症状への対応が困難であり、仮に退院しても居住とケアの体制が整備されておらず、家族が介護で疲労してしまう現状などがあるとのことでした。

二部では、山谷地域で宿泊所を運営しているNPO法人(山友会、ふるさとの会、友愛会)から共同報告をしました。共通していることは、利用者の方の多くは、心身に疾病あるいは障害を抱えているということですが、十分な日常生活支援があれば安心していただくことが十分に可能であるということです。たとえば、他の簡易宿泊所を利用していただけ部屋で失禁したので退去させられたという方がいます。しかし、定期的に福祉サービスや医療サービスを受けることに加えて日常的にちょっとした身の周りのことを気にしてくれる職員が近くにいれば他の利用者の方にも大きな不安を与えないという説明がありました。また、NPO訪問看護ステーションコスモスの鶴澤看護師からは、介護保険内のサービスだけでは日常生活を支援することが困難であるという報告がありました。つまり、医療・

福祉サービスの充実が図られることに加えてより一層生活支援サービスの重要性が増しているのだと強く感じました。

最後に、浅草病院医師・NPOシェア(国際保健協力市民の会)の本田徹医師から、地域ケア連携が高齢者や低所得者だけではなくより多くの人の生活の支えに不可欠であるという問題提起がありました。山谷地域を中心に出来つつあるケアのネットワークがより普遍的なものとして多くの人に認知されることでより大きな力になると本田先生の話聞いて強く感じました。

(嶋田)



本田医師



NPO友愛会吐土理事長



NPO訪問看護ステーションコスモス 鶴澤氏

4.ふるさと寿々喜屋(すずきや)ハウス開設

2月1日、墨田区本所2丁目に「自立援助ホームふるさと寿々喜屋ハウス」を開設しました。静かな住宅街にあり、朝青龍で有名になった高砂部屋(本所3丁目)をはじめとする相撲の街両国が隣接し、隅田川を渡るとすぐそこは浅草、西にしばらく歩くと建設中のスカイツリー(新東京タワー)、もう少し足を延ばすと賑やかな錦糸町の街、と文化と歴史に恵まれたすばらしい環境だと言えます。

ふるさと寿々喜屋ハウスは「地域協働」をテーマにしています。先代からお蕎麦屋さんを営んできたオーナーは、しばらく前からご両親の介護に直面してきました。介護施設などを利用してきたものの多大な費用がかかることに加えて、ご両親に住み慣れた地域で生活して欲しいというかつてからの強い希望がありました。また、ご両親のことに留まらず、同様の願いを地域の方々が持ち、それならばということで今回のプロジェクトにご協力いただくことになりました。

ふるさと寿々喜屋ハウスは、普通の住宅をリフォームした3階建であり、温かみのある内装になっています。各部屋(個室)には冷暖房が完備されています。1階は歩行困難な要介護高齢者を中心に6部屋、2階と3階に各7部屋で定員20名となっています。

厚生労働省が昨年末に発表した数字によると、特別養護老人ホームの入所申込者は42.1万人とされています。

また、2001年3月に同省が発表したいわゆる「社会的入院」患者は27万5000人とされています。そういう中において20名という定員はささやかな数ですが、一人でも多くの方が地域での生活の新しい一歩を着実に踏むことができることには大きな意味があると思います。また、これまで住み慣れた地域や人間関係の中で引き続き暮らし続けられるということはどんなに素晴らしい医療サービスにも勝るのではないのでしょうか。

私自身は訪問介護のサービス担当責任者ですが、24時間体制で生活を見守るスタッフがいるということは、サービスを提供する私たちにとっても大きな安心となっています。私たちには気付くことの難しい利用者の些細な容体の変化などを教えてもらえることで迅速な対応が可能になるからです。

ふるさと寿々喜屋ハウスでの暮らしをスタートされた方々がより安心して生活できるように、地域で活躍している診療所や病院、そして歯医者さんなど様々な機関のご協力をいただきながらより良い地域ケアのつながりを築くように努めていきたいと思ひます。

(玉城)



4.ふるさと寿々喜屋(すずきや)ハウス開設

1月29日、東京都社会福祉協議会婦人保護部会の主催によりシンポジウム『現代社会における「女性の貧困を問う!』が飯田橋で行われました。コーディネーター及びパネリストは下記の皆さんです。

(コーディネーター)

山崎美貴子氏 神奈川県立保健福祉大学学長

(パネリスト)

伊東昭子氏 更生保護施設紫翠苑補導主任

花井重明氏 更生施設ふじみ施設長

田口道子氏 婦人保護施設いこいの家施設長

小林英夫 当会就労支援ホームはるかぜ施設長

初めに、各パネリストから施設入所中及び退所後の生活支援の報告がありました。

伊藤氏からは、更生保護施設紫で未成年者を支援することの難しさの報告がありました。

子どもたちが攻撃的であったり大人に対する偏見や不信感が根強かったりするため、関係作りに援助者は大変苦労しているようでした。また、短い期間での関わりのために十分な支援ができないというやり切れなさもあるようです。

花井氏からは、1年間に亘ってふじみで生活しても地域での生活には容易に移行できない現実が説明されました。

不安による自傷行為、様々な依存症、金銭管理能力の不足など、自立に向けて地域でどのように課題に取り組むことができるのかという問題提起がありました。

当会小林からは、就労支援ホームはるかぜの利用者6名のうち3名がホームヘルパー2級資格を取得し当会関連の訪問介護事業所で既に勤務開始しているという報告がありました。食堂で配膳のお世話をするなど、ヘルパーになる前からケアする相手の皆さんをよく知っていたので順調なスタートが切れたようです。仕事を通じて社会に参加する大切さが伝わってきました。

最後に、田口氏から婦人保護施設の現状報告がありました。慈愛荘が妊娠中の方専用であるというように、緊急性や多様な困難要素に対して各施設は特化した援助プログラムを設けているようです。就労支援の一環として喫茶店を経営するという試みもされています。

パネリストの皆さんからは「女性の貧困には異性との関わりが深く関わっている」という共通した意見があるとともに女性を取り巻く今後の生活環境に対する懸念が表明されました。

私の勤務する女性施設に入所する方の多くは、地域社会から孤立しています。現場に携わる身として、どのような声を上げていけばよいのか深く考えさせられたのと同時に地域でどのような支援のつながりを築くことができるのか考えさせられる良いきっかけとなりました。

(嶋田)

発行元: 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会

〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6

TEL: 03-3876-8150 FAX: 03-3876-7950

E-mail: hurusato@d5.dion.ne.jp

HTML: <http://www.d5.dion.ne.jp/~hurusato/>